様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2017～2018
課題番号：１７Ｈ０６５８５

研究課題名（和文）バルザックと文芸誌の詩学（1833-1836年）

研究課題名（英文）Balzac and the Literary Magazine (1833-1836)

研究代表者
谷本　道昭（Michiaki, Tanimoto）

東京大学・大学院総合文化研究科・助教

研究者番号：５０８０６９７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1833年から1836年までの期間を対象に、この間にバルザックが寄稿を行なった文芸誌の調査と収集、ならびに、文芸誌に掲載されたバルザックの作品、関連資料の読み込みを行い、バルザックの創作と1830年代フランスの文芸誌の詩学がどのように関係していたのかを考察した。フランス国立図書館での資料調査、収集、バルザックの著作や関連する研究文献の収集、分析を経て、国内学会・研究会での研究発表、研究論文とその他の論考を通じて、研究成果の公表を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の主な成果としては、資料収集と研究発表をあげることができる。資料収集としては、1833年から1836年までの期間にバルザックが寄稿を行なった文芸誌を網羅的に収集することに成功したほか、古典的研究書から最新の研究まで、多くの研究文献を取り揃えることができた。研究発表としては、バルザック作品の読解分析を中心に、学会・研究会での口頭発表、研究論文や図書の執筆を通じて研究成果の公表につとめた。また、研究期間中に日仏の学会、研究会、セミナーに参加することで、両国の研究者との交流の機会を持つことができたことも大きな収穫であった。

研究成果の概要（英文）：In this research, I collected and surveyed the literary magazines in which the novels by Balzac appeared, and examined his works from 1833 to 1836 in the cultural-historical context. The relation between Balzac's literary creation and the literary magazine's poetics — the whole series of its material and immaterial conditions — is mainly discussed. After having researched in the national library of France, and critically analyzed the primary and secondary materials, I published the results of this research through the presentations in academic conferences, the papers, and the other writings.

研究分野：文学

キーワード：バルザック　文芸誌　フランス文学　出版文化史　19世紀

１．研究開始当初の背景

近年フランスでは、文学研究と出版文化史研究の発展的な融合を目指す学際的研究として、文学作品を掲載する文芸誌や新聞といった出版メディアを対象とする新たな研究が進められており、文学作品の分析、解釈にあたって、これまでの文学研究では論じられることの少なかった「出版メディアの詩学」に目が向けられ始めている。

本研究「バルザックと文芸誌の詩学（1833-1836 年）」は、19 世紀前半のフランスを代表する作家であるバルザック（1799-1850 年）の 1833 年から 1836 年にかけての創作に焦点をあて、「出版メディアの詩学」研究の問題意識と視座を共有しながら、同時代の文芸誌との関わりにおいてバルザックの創作を考察する取り組みである。

２．研究の目的

本研究で取り上げる 1833 年から 1836 年までの期間は、文芸誌の勃興期、隆盛期として文学史、出版文化史においてその重要性が強調されてきた。この間にバルザックは、「文芸誌の救世主」の異名を取り、複数の文芸誌の中心的な寄稿者として獅子奮迅の活躍を見せていたことで知られる。しかし、バルザックは文芸誌からの依頼に精力的に応えながらも、実際は編集、出版上の様々な要請、制約に苦慮し続け、両者の関係は時を待たずして悪化していく。1836 年 6 月、『パリ評論』との契約解消によって、1829 年から継続してきたバルザックと文芸誌との関係はひとまず終わりを迎えることとなる。

こうした時系列に基づきながら、バルザックの作品とその掲載誌の分析を平行して行っていくことで、文学と出版の関係性の中でバルザックの作品を読み解くと同時に、文芸誌という 1830 年代を代表する出版メディアの可能性と限界を明らかにすることを本研究の目的とする。本研究では『フェラギュス』（『パリ評論』掲載）『斧に触れるな［ランジェ公爵夫人］』（『エコー・ド・ラ・ジューヌ・フランス』掲載）『金色の眼の娘』の三編から構成される『十三人組物語』（1834 年 4 月刊行）、『ゴリオ爺さん』（『パリ評論』掲載後、1835 年 3 月刊行）、『谷間の百合』（『パリ評論』掲載後、1836 年 6 月刊行）の三作品を主たる研究対象としたい。

３．研究の方法

本研究は主に以下の三つの方法に従って行われた。

（１）本研究の一次資料として、バルザックが寄稿を行なった文芸誌の調査と複写の収集を行う。あわせて、19 世紀フランスの事例を中心に、文学と出版の関係を論じた先行研究を二次資料として収集する。

（２）バルザックと文芸誌、編集者との関係の調査を行う。書簡や伝記資料をもとに、文芸誌との契約から作品掲載に至るまでの経緯を跡付けるとともに、文芸誌、編集者との諸々のやり取りを検証する。

（３）文芸誌に掲載されたバルザックの作品を中心に、関連資料の読み込みを行う。それによって、バルザックの創作と 1830 年代フランスの文芸誌の詩学がどのように関係していたのかを明らかにする。

４．研究成果

本研究の成果を以下の三つの軸に即して報告する。

（１）バルザックが寄稿を行なった文芸誌の調査と複写の収集に関して

1833 年から 1836 年までの期間にバルザックが寄稿を行なった文芸誌については、1830 年から 1836 年までの期間にフランスで出版された文芸誌を網羅的に調査分析したパトリック・ベルシエの浩瀚な博士論文（Patrick Berthier, *La Presse littéraire et dramatique au début de la Monarchie de Juillet (1830-1836)*, Presses Universitaires du Septentrion, 1997, 4 vol., XVIII-2187 p.）、バルザックの創作の全軌跡を年代順に追い、初出紙誌情報を含め、作品掲載の状況、書誌情報をくまなく記載したステファヌ・ヴァションによる博士論文（Stéphane Vachon, *Les Travaux et les jours d'Honoré de Balzac : Chronologie de la création balzacienne*, CNRS, 1992, 336p.）などを参照することで、『パリ評論 *Revue de Paris*』『エコー・ド・ラ・ジューヌ・フランス *L'Écho de la jeune France*』『クロニック・ド・パリ *La Chronique de Paris*』『ヨーロッパ文芸 *L'Europe littéraire*』の四誌であると特定することができた。なお、バルザックの創作の断片が掲載された 1833 年創刊の『コーズリー・デュ・モンド *Les Causeries du monde*』は、文芸誌の体裁や刊行リズムを取り入れた「書籍」であることが調査中に判明したため、本研究の主要コーパスからは除外した。

これらの文芸誌は歴史的価値を有する文字資料として、いずれもフランス国立図書館の研究書庫に所蔵されている。電子化されている資料についてはインターネットを通じて入手することができた。電子化されていない資料については、フランス国立図書館への複製依頼、実地調査を行うことで、該当期間中に刊行された全号の複写、電子ファイルを入手することに成功した。バルザックの創作を、同時代の出版のコンテクストの上に位置付け直しながら分析、解釈するにあたって、一次資料を網羅的に収集することができたのは大きな収穫であった。

（２）バルザックと文芸誌、編集者との関係の調査に関して

バルザックと文芸誌、編集者との関係を調査するにあたっては、（１）で挙げたパトリック・ベルシエ、ステファヌ・ヴァションの博士論文に加え、1831 年から 1836 年までの期間におけ

るバルザックによる文芸誌への寄稿を総合的に俯瞰、分析したジョエル・グレーズによる研究論文（Joëlle Gleize, « Rythmes et supports de l'écriture romanesque de Balzac (1831-1836) », *Lieux littéraires/La Revue*, Université Paul Valéry, n° 2, décembre 2000, p. 245-259.）や、1829 年から 1836 年までの期間の、文芸誌の勃興期、隆盛期における文学創作と出版の関係を詳細に論じたマリー＝エーヴ・テランティの博士論文（Marie-Ève Thérenty, *Mosaïques. Être écrivain entre presse et roman (1829-1836)*, Champion, « Romantisme et Modernités », 2003, 735p.）などの先行研究に多くを学び、バルザックと文芸誌の関係が、当初は両者の目論見が合致した画期的、きわめて生産的なものでありながらも、創作者の自我と文芸誌の体面がしばしば衝突する、緊張感に満ちた関係であったことを改めて確認することができた。

また、本研究の遂行中に、2006 年から 2017 年にかけて刊行されたロジェ・ピエロ、エルヴェ・ヨン編纂による全三巻の『バルザック書簡集』――第三巻に付されたインデックスによって、人名、作品名、雑誌名による検索が可能となっている（Balzac, *Correspondance*, édition établie, présentée et annotée par Roger Pierrot et Hervé Yon, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2006-2017, 3 vol.）、2013 年に刊行されたジェラール・ジャンジャンブルによる最新版の伝記（Gérard Gengembre, *Balzac : Le forçat des lettres*, Perrin, 2013, 392p.）を入手できたことで、バルザックと文芸誌の関係を同時代の編集者――『パリ評論』編集長アメデ・ピショ、フランソワ・ビュロズ、『エコー・ド・ラ・ジューヌ・フランス』創刊者アルフレッド・ネットマン、バルザック自身が編集長を務めた『クロニック・ド・パリ』共同出資者ウィリアム・ダッケット、『ヨーロッパ文芸』創刊者ヴィクトール・ボアン、アルフォンス・ロワイエ、カポ・ド・フイイードなど――との交渉や作品掲載前後の様々なやり取りを通じて知ることができた。

なお、バルザックと文芸誌、編集者との関係の調査に関しては、その研究成果の一部を〔学会発表〕「文芸誌を再考する―バルザックと文芸誌の詩学序論」として公表した。

（３）文芸誌に掲載されたバルザックの作品の読解、分析に関して

（１）（２）の資料収集、調査を行うことで得られた知見を活かしながら、1833 年から 1836 年までの期間に文芸誌に掲載されたバルザックの作品のうち、『フェラギュス』（『パリ評論』掲載）『斧に触れるな［ランジェ公爵夫人］』（『エコー・ド・ラ・ジューヌ・フランス』掲載）『金色の眼の娘』の三編から構成される『十三人組物語』（1834 年 4 月刊行）、『ゴリオ爺さん』（『パリ評論』掲載後、1835 年 3 月刊行）の綿密な読解を行なった。

具体的には、各作品について、初出誌版、単行本版、全集収録版の併読、比較作業を行うと共に、掲載誌以外での文芸誌上での批評受容の網羅的な分析を行なった。その際、バルザック作品の単行本版を底本としつつ、付録資料として初出誌版、同時代の批評記事、そのほかの重要な関連資料を豊かに収録するアンドルー・オリヴェールによる一連の批評校訂版、とりわけ『ゴリオ爺さん パリ物語』（Balzac, *Le Père Goriot. Histoire parisienne*, édition critique enrichie d'un Cédérom, établie et présentée par Andrew Oliver, Champion, « Textes de littérature moderne et contemporaine », 2011, 304p.）からは、バルザックの創作と文芸誌の詩学の双方に目を向ける編者の研究手法の面でも多くを学ぶことができた。

文芸誌に掲載されたバルザックの作品の読解、分析に関しては、その研究成果の一部を、バルザック小説の代名詞と言える人物再登場法を、初出誌である『パリ評論』の編集方針や、バルザック小説をめぐる同時代のその他の文芸誌の論調と絡めて論じた〔学会発表〕「バルザック『ゴリオ爺さん』、ボーセアン夫人の最後の舞踏会をめぐって」、バルザック小説に特徴的な「パリの泥」のモチーフが、文芸誌掲載作品『十三人組物語』『ゴリオ爺さん』と、単行本収録作品『シビレエイ』において、如実に異なる現れ方をしていることを指摘した〔雑誌論文〕「バルザックとパリの泥」として公表した。その他、〔図書〕「バルザックとパリの真実 『ゴリオ爺さん』のパリ」、〔その他〕「書評 オノレ・ド・バルザック『イヴの娘』宇多直久訳」の二編は、掲載媒体の性格上、いわゆる「研究論文」の体裁に従って書かれたものではないが、本研究を遂行する中で得られた知見を活かす形で執筆されたものであることを付言しておきたい。

なお、本研究の遂行中に、当初の計画を変更し、『谷間の百合』（『パリ評論』掲載、1836 年 6 月刊行）を研究対象から除外することとなった。文芸誌の詩学と関連付けながら『谷間の百合』を論じるためには、1830 年代後半に相次いで創刊された「女性雑誌 presse féminine」と総称される女性編集者・執筆者を中心とする新聞・雑誌メディアの総合的な調査が不可欠であることがわかり、それには、本研究とは別の枠組みが必要であると判断したためである。

本研究で主要コーパスとした文芸誌は、いずれも男性編集者によるものであり、女性執筆者による記事の掲載は限られたものであったが、他方で、『女性新聞 *Journal des femmes*』『家庭の母 *La Mère des familles*』『女性の助言者 *Conseiller des femmes*』といった女性雑誌が、批評記事や男性作家への直接的な働きかけを通じて、バルザックの創作を含め、同時代の文学の動向に大きな影響を与えたことがすでに指摘されている（Annemarie Kleinert, *Le "Journal des dames et des modes", ou la conquête de l'Europe féminine (1739-1839)*, Thorbecke, 2001, 502p.）。本研究を発展的に継承させる形で、バルザックの創作と「女性雑誌」の詩学の関係を問うことを、今後の課題の一つとしたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

谷本道昭「バルザックとパリの泥―『金色の眼の娘』『ゴリオ爺さん』『シビレエイ』」『言語・情報・テクスト』25 号、2018 年、51-66 頁。（査読無）

〔学会発表〕（計２件）
（１）谷本道昭「バルザック『ゴリオ爺さん』、ボーセアン夫人の最後の舞踏会をめぐって―「罪を犯した女たち」と人物再登場法」日本フランス語フランス文学会全国大会、獨協大学、2018 年 6 月 1 日。
（２）谷本道昭「文芸誌を再考する―バルザックと文芸誌の詩学序論」『東京大学言語態研究会』東京大学、2017 年 12 月 26 日。

〔図書〕（計１件）
谷本道昭「バルザックとパリの真実　『ゴリオ爺さん』のパリ」、野崎歓編著『フランス文学を旅する 60 章』明石書店、2018 年、121-125 頁。

〔その他〕（計１件）
谷本道昭「書評 オノレ・ド・バルザック『イヴの娘』宇多直久訳」『図書新聞』3392 号, 2019 年 3 月 23 日、6 頁。

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：なし
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：なし
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。